

崇武館
館長 飛鳥宗一郎
(宗雄)

先人の言葉から学ぶ（その12）

為せば成る 為さねば成らぬ 何事も

成らぬは人の 為さぬなりけり（3）

出典・・・上杉鷹山

4 鷹山の生誕と上杉家への養子

(1) 鷹山の誕生

後に米沢藩上杉家・9代藩主となる上杉鷹山は、寛延4年（1751年）7月20日（太陽暦9月9日）、日向高鍋藩主・秋月種美（1718～87年）の二男として江戸藩邸に生まれた。母は筑前秋月藩主・黒田長貞（1695～1754年）の娘・春姫で、幼名は松三郎といった。

日向国は今の宮崎県で、高鍋藩は県中央部の太平洋に面した僅か3万石の小藩である。又母方の筑前秋月藩は、現在の福岡県朝倉市に藩庁を置く福岡黒田藩の支藩5万石で、いずれも石高が低く、外様大名であった。

米沢藩⑧定重に子がなかったため、松三郎9歳のとき養子縁組が内定し、翌年10歳で養継嗣となって上杉家に入ると名を直丸勝興と改めた。

明和元年（1764年）15歳のとき、幕府の10代将軍・徳川家治にお目見えし、翌明和3年（1766年）元服とともに弾正大弼（だんじょうだいひつ）の官職を受け上杉治憲と名乗り9代藩主を継いだ。

⑨治憲が藩主となった頃、米沢藩の財政は全国各藩の中でも突出して窮乏の極みにあって、巨額の借財は慢性化し更に嵩むばかり、この窮状の中で領民の父母となって苦難を切り抜けるため、家臣、領民ともども粉骨砕身、藩政の再生と民心の安寧に一生を捧げる人生へと歩み出すのであった。

なお、⑨上杉治憲から名を鷹山と変えたのは享和2年（1803年）11月からで、仏道に帰依して鬚を落とし、出家名としての名乗りである。

その謂れは、米沢藩の北東部で現在の白鷹町に位置し、出羽山形藩（当時の藩主は秋元永朝、1738～1810年）の現・山形市との境界をなす白鷹山に由来する。鷹山は藩主時代から度々登頂して領内を見わたし、あるいは眺望を楽しんだとされている。



領内から白鷹山（標高 994m）を臨む



福満虚空蔵尊を祀る白鷹山山頂の社

(2) 藩主たちの早世

上杉家では、⑤吉憲が 39 歳で病死した後、その長男の宗憲が 8 歳で 6 代藩主を継ぐが 20 歳で没し、その後は次弟の宗房が 17 歳で 7 代藩主となったが、⑦宗房も 29 歳で早世するという悲運に見舞われた。

⑦宗房の亡き跡の 8 代を継ぐのは、三男の貞千代は高家旗本・畠山家の養子となり家督を継いでいたため、仕方なく藩主に指名されることになったのが四男・重定（1746～98 年）で、延享 3 年（1746 年）9 月 26 日 25 歳で襲封した。

⑧重定の正室は尾張藩主徳川宗勝の娘の豊姫であるが、子がないまま毒物誤飲により急死し、側室にも子がなく悩みの種となっていた。

話は遡るが、寛文 4 年（1664 年）5 月に③綱勝の急死（私は、③綱勝の義弟に当たる吉良上野介義央による謀殺を主張する）に際して継子がなかったため、③綱勝の亡き正室・豊姫の父で幕府老中職にあった会津藩主の保科正之（1611～73 年。二代將軍徳川秀忠の四男で、正之の 2 代後から松平姓を名乗る。徳川家康の孫になる）が幕閣たちに懇願して回り、「末期養子」という口実をもって藩存続の許しを得た。その代償として米沢藩 30 万石から 15 万石に減封されるという憂き目に遭っている。

これらの状況から、重臣たちが急ぎ養子探しに奔走したであろうことは想像に難くない。

身分制度の垣根が厳しく立ちはだかる封建社会では、殊更に血縁を重んじる傾向が強かった。また、婚姻や養子縁組などは相応の間柄以外は皆無に等しく、同じ武士階級の中でさえ家禄家格が同等の間に限って縁組されてきた。まして殿様クラスの後継者探しとなれば、祖先との血縁を頼りに人物探しとなるのは必定である。

(3) 養子縁組の切っ掛け

⑧重定が襲封して10年余り、とにもかくにも養子を迎えるのが喫緊の課題となり、系図を持ち出して探索したことは間違いない。

それを耳にしたのが、松三郎（後の鷹山）の生母・春姫の母、即ち松三郎の母方の祖母で筑前秋月藩前の藩主の正室・瑞耀院（夫の藩主が死亡すると、正室は出家し院号で呼ばれる習わしで、本名は豊姫）であった。

瑞耀院は④上杉綱憲の娘だったので、松三郎の母・春姫と⑧重定は従兄妹の間柄となる。

瑞耀院は⑧重定に使者を送り、『春姫の子・松三郎は、今年ようやく9歳になったばかりだが、幼少から聡明にして孝心に篤く、才能も特に優れた非凡さがある。例えば遊び事一つにしても尋常の子供と違っているので、世間の人たちも驚いて評判している。松三郎を養子に迎えてはどうか』と熱心に薦めたと言われる。

松三郎は、早くして利発さは他に抜きん出る資質をもっていて、後に名君と仰がれる兆しを既に現わしていたのだろう。

この推挙が効を奏し、宝暦10年（1761年）に松三郎と上杉家との養子縁組は内定し、翌宝暦11年（1761年）10歳で⑧重定の養継嗣となり名を直丸と改めた。

ところが、この内定から間もなく、⑧重定側室の小川氏「於勢の方」が国元で男子を出産し、勝熙（1760～1807年）と名付けられ、更に4年後には治広（1764～1822年、10代藩主）が誕生している。

後に触れるが、藩主となった後の⑨治憲にも男子が出生し、長男・顕孝（1776～94年）は11代藩主となるはずだったが19歳で「はしか」に罹り早世し、次男の寛之助（1778～79年）は1年半の短い命であった。

なお、上杉鷹山は、松三郎、直丸から治憲と名を改めて9代藩主となるが、これ以降は単に出家名の「鷹山」と記すことにする。

コメント

鷹山は、生れながらにして利発で聡明の資質を持っていたに相違ない。それは「生来の素質」として備わった生れ付きである。

確かに教育と環境は人を変えるばかりか、「努力に勝る天才はなし」の言葉もあるが、努力したからといって誰もが天才になれるわけでもない。そのことは、人柄（性格）にも言えるかもしれない。但し、己の欠点や弱点に自ら気づき、良い方向へと転換を図って努力する価値は無視できない。

鷹山の人生を読み進めると、意思と行動が意識せずとも一致し、全てが「地でいっている」ようにさえ思える。

換言すれば、孟子の「性善説」の中でいう「四端の心」を生来具備していたのではというのが、私の鷹山観である。

「四端の心」とは次であるが、この場合「端」とは、兆し、はしり（端緒）、萌芽を意味する。

1 惻 隠 他者の苦悩を見過ごせない忍びざる心。憐みの心。

- 2 羞 悪 不正を羞恥する心。
- 3 辞 讓 謙讓の心。
- 4 是 非 善悪を分別する心。

更に、鷹山の素質に加え、細井平洲の教育が及ぼした影響は見逃せない。平洲の唱える「実学」の実践から導かれた人本主義が、「どん底の米沢上杉藩」の窮状を打開できた最たる基因になったのではと思う。

発想が優れているからといって、全ての難題を打破できるものではない。有能な人材（リーダー）のみが解決する力を有するからである。

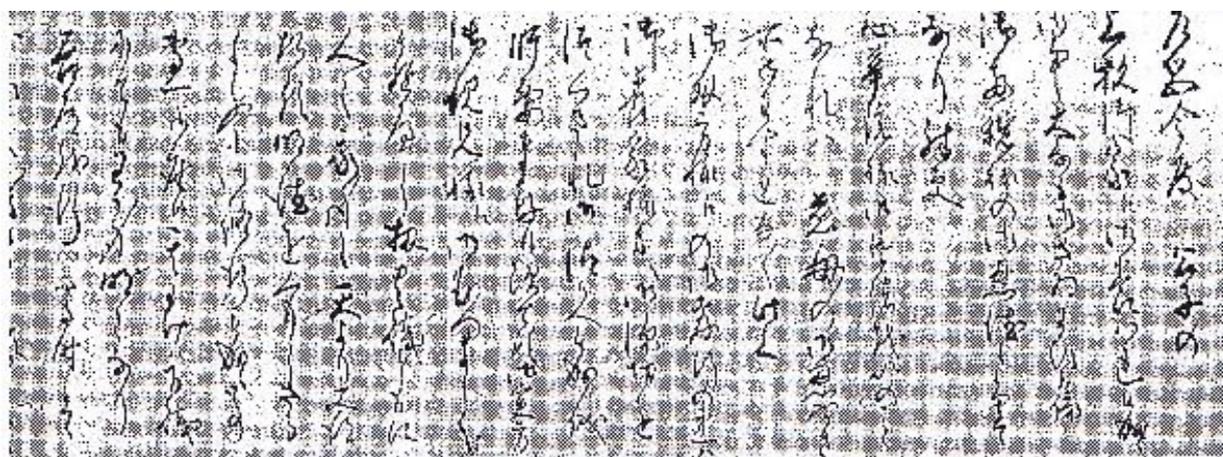
(4) 養子内定と秋月家

日向高鍋藩は学問尊重の家柄で知られ、藩主自ら率先して学道に励むのを伝統とする家風があつて、鷹山もそのような環境の元で育った。

鷹山（当時は松三郎）の傅役（もりやく。養育職）を務めた家老の三好善太夫は、養子入りが決まると祝詞とともに懇切なる訓戒書を献上して励まし、世嗣として上杉屋敷に移る時も「臚に奉る書」をもって、君主道徳について教訓を与えている。

その内容には『御養家を治めかねるようなことがあつては、大きな恥辱であり、実父の家を治め得ないことよりもその罪は重く、御双方様への御不幸となります』とあるように、武家社会共通の倫理観を諄々と諭している。

鷹山は、善太夫から送られた二通の書を生涯にわたり秘蔵し、時折取り出しては自戒にしていたという。現在、上杉博物館に所蔵されている。



三好善太夫の訓戒書（上杉博物館蔵）

コメント

善太夫の言葉にあるように、自分よりも相手側の立場から物事を考える、これが当時の規範であつて、己の利よりも義理あるいはお互いの関係や立場が優先される。この考え方は現在に至ってなお我が国の国民性に残存している。

義理の世界をないがしろにすれば恥とされ、武家社会では特に三綱（君臣、父子、

夫婦間の守るべき道德)、五常(仁、義、礼、智、信の徳性の拡充)を拠り所としていたから、殊更重要視される徳目の一つである。また、反すれば恥辱であり人間失格とみなされた。

余談だが、ルース・ベネディクトは「菊と刀」という著書において、日本人は「恥の文化」で西欧人は「罪の文化」と規定し、「恥の文化」は「罪の文化」より道徳的に劣った文化と決め付けているが、私は、この論法とは全く反対の立場で日本文化を考えている。何故この本が、1950年代の日本でベストセラーになったのか、当時の国民感情に納得できないものを感じている。



ルース・ベネディクト

(5) 養子時代の事件

先月の3.(5)で述べた森郡代の誅殺という事件である。

⑧重定は、下級武士出身の森平右衛門を寵愛し出世昇進させたことで、森の思い上がりと専横政策がもたらす差別や弊害ばかりが蔓延し、藩の窮状を打開しようとする意思と逆行していた。宝暦13年(1763年)2月、江戸家老の竹俣当綱(1729~93年)が米沢城内において譜代の老臣3人立会いのもとに森平右衛門を「問罪書」を示し反省を促すが無視され、当綱は仕方なく森を討ち取った。

この改革を計画し実行に移したのが次項で述べる「菁莪社中」の人たちで、鷹山が藩主となったときのブレーンとなり改革の推進役となるのである。改革を成功に至らしめるには、旧弊を打開する転換が不可欠であり必然であった。

(6) 菁莪社と細井平洲

菁莪(せいが)とは、「多くの人材を教育する」、「人材を教育する楽しみ」を意味し、「詩経」小雅を出典とする。

菁莪社は、藁科松伯(1737~64年)が主宰する私塾で、藩政改革の道を探りながら真剣に討論を重ねていた革新派グループである。松柏は元文2年(1737年)米沢大町で御側医の藁科周伯の子として生まれた。12歳のとき父を失い、程なく江戸に出て21歳で江戸御留守番となり、続いて23歳で⑧重定の御側医となった英才である。

医者でありながら儒学をはじめとする博学識見に秀れ、しかも信望厚く、江戸家老の竹俣当綱の他、荏戸善政、木村高広、佐藤文四郎など、後に鷹山の改革をともに働く俊才たちが社中に集まっていた。

松柏や竹俣たちは、⑧重定に米沢藩の将来を託す望みを失い、英邁な世子・直丸に期待する他に道はないと思っていた。その教育のため賓師(貴人や諸侯から師として迎えらるる人)を探していたところ、松柏は江戸市中で辻講釈をしていた細井平洲(1728~1801年)の高見と風格に深い感銘を受け、請うてその門弟となり、竹俣他の

同士も入門するとともに、家老竹俣の進言により平洲は直丸の賓師として迎えられることになった。

時に、明和元年（1764年）直丸14歳、平洲37歳の運命な出会いとなった。

コメント

優れた人物との出会いは、願って成るものではなさそうだ。そこには出会いが叶う運命的な要素が伴う。互いに丁度よいタイミングで生きていなければならないし、すれ違いでは会えないから機を得る必要がある。正に、松柏先生の得たベストタイミングがもたらした幸運であろう。

私が大塚博紀先生（1892～1982年）に出会えたのも、たまたま和道流の空手をしていた大学に入り、友人の紹介で神奈川大学空手部と知り合い、そこで短時間だったが大塚先生の指導を受け、初段合格後半年以上過ぎてから山形大にお出でになったのに始まる。他の空手の先生たちと比較する気など毛頭ないが、大塚先生でよかった、最善の出会いであったと確信している。

また、人は相性とか性格、思考の方向性にも個人差がある。人との出会いは、全ての人に共通して普遍的に有意義に働くものとは限らない。

鷹山の場合、松柏らがこの人と白羽の矢を立てたのが幸いしたということで、「最善の出会い」であったに相違ない。

(7) 細井平洲の学問

平洲は尾張国平島村（現在の愛知県東海市）に生まれ、京都に遊学するが師事するに足る学者はいないと帰郷し、名古屋の中西淡淵（1704～52年）に折衷学派（既に広がっている学派に偏せず、折衷穏当を図った儒学者たちをいう）を学び、淡淵亡き後は江戸に私塾「嚶鳴館」を開き折衷学を大成させた。平洲は、諸派の学説を取捨選択し、何よりも国家と民生の安泰を主眼とする政治政策の実践に適うかどうかを考えた。

平洲の学問は、理論の純粹性や独創性を標榜するのではなく、為政者の君主道徳を最も重点とする教育であり、国家秩序の安定形成にあったので、平洲の折衷学は実学（実践、実利の学）と呼ばれた。この平洲が唱える学問は、鷹山の生来の性格や方向性とも一致し、鷹山の内部で一層増幅されたものと考えられる。

平洲は、鷹山の要請により都合3回米沢に下向し、講義を行うとともに藩校の興譲館創設への主導を担っている。

(8) 上杉家の家系図

戦乱の終焉した江戸時代とはいえ、上杉家の家系図はそんなに複雑ではない。

年明けから、⑧重定が隠居（引退）して⑨治憲（鷹山）が襲封し、標題を始めとする本懐として伝えなかった言葉を取り上げる。ここで一応今まで述べてきたところを理解していただくため、次に系図を掲載する。

初代景勝から廃藩置県を迎え米沢藩最後の殿様となる13代茂憲までである。

本稿の作成に当たり次を参考資料とし、又は一部を引用している。

- 1 飛鳥神社由緒抄、並びに同別考（飛鳥公民館）
- 2 山形県の歴史（著者：誉田慶恩・横山昭男、山川出版社）
- 3 米沢藩（著者：小野 榮、現代書館）
- 4 代表的日本人（著者：内村鑑三、訳者：鈴木範久、岩波文庫）
- 5 漆の実のみのもる国、上・下（著者：藤沢周平）
- 6 武士道（著者：新渡戸稲造、訳者：奈良本辰也、三笠書房）
- 7 小説・上杉鷹山（著者：童門冬二、集英社文庫）
- 8 上杉鷹山の経営学（著者：童門冬二、PHP文庫）
- 9 「恥の文化」という神話（著者：長野晃子 草思社）